今週の為替相場見通し（2016年9月5日）

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	（円）		101.76 ～ 104.32	103.99	102.50 ～ 105.50
ユーロ	（ドル）		1.1123 ～ 1.1255	1.1157	1.1050 ～ 1.1350
（1ユーロ=）	（円）		113.88 ～ 116.37	116.00	115.00 ～ 118.00
英ポンド	（ドル）		1.3060 ～ 1.3352	1.3290	1.3100 ～ 1.3400
（1英ポンド=）	（円）	＊	133.35 ～ 138.84	138.17	136.50 ～ 140.50
豪ドル	（ドル）		0.7490 ～ 0.7616	0.7573	0.7500 ～ 0.7650
（1豪ドル=）	（円）	＊	76.70 ～ 78.79	78.68	77.50 ～ 80.50

（データ）先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、＊印の項目はブルームバーグ。

1．米ドル

為替営業第二チーム　山本 一暁

（1）今週の予想レンジ：　102.50　～　105.50　円

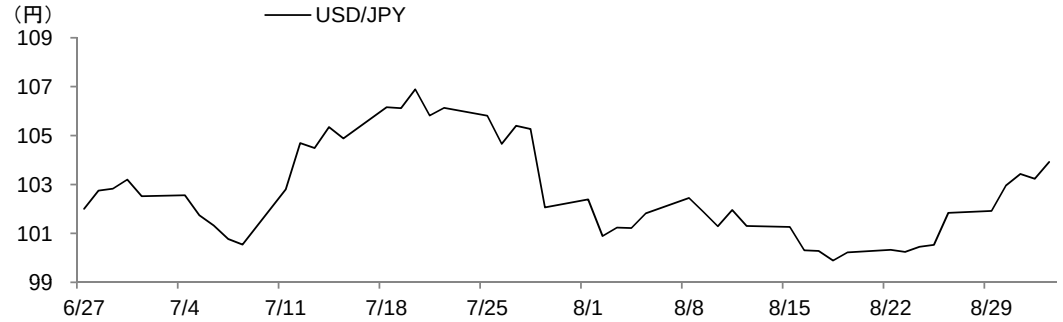
（2）ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は、米8月雇用統計への期待感から堅調推移となり、同指標の発表後に一段と上昇した。週明け8月29日、101円台後半でスタートしたドル/円は、海外時間では前週26日のイエレンFRB議長ならびにフィッシャーFRB副議長のタカ派な発言が意識され、102.39円までじり高の展開。その後、ドル買いの流れが一巡し、ドル/円は102円割れの水準まで小緩んだ。翌30日、東京時間では5・10日の本邦輸入勢の買いなどが入り、ドル円は102円台前半で底堅く推移。NY時間では良好な米経済指標の結果やFRB高官のタカ派発言を背景に再びドル買いが優勢となり、円買いポジションの巻戻しも入る中、ドル円は103.14円まで上昇した。翌31日、東京時間こそドル/円は月末絡みの本邦輸出勢の売りに上値を抑えられ103円近辺で揉み合い推移したが、海外時間では米8月ADP雇用統計が市場予想比上振れたことを受け、103.54円までじり高となった。1日は、良好な英国経済指標の結果を受けポンドが急伸、ポンド/円に連られてドル/円も上昇基調となり、104円ちょうどまで買い進まれた。しかしながら、同水準では投機筋による利益確定の売りが入り、また米8月ISM製造業景況指数が節目である50を下回ったことから、ドル/円は103円台前半まで売られた。米8月雇用統計は非農業部門雇用者数が前月比+15.1万人と市場予想の同+18万人を下回ったほか、失業率や平均賃金も弱い内容だったため、ドル/円は一時102.80円まで下落。しかしながら、米長期金利利回りが上昇に転じると、ドル/円も反発。前日高値の104円ちょうどを上抜け、ストップロスを巻き込みながら104.32円まで上伸。その後はやや値を戻し、103円台後半で越週した。

今週のドル/円はやや方向感に欠けるも、米利上げへの期待感が下値を支えると予想する。先々週末のジャクソンホールでのイエレン議長講演ならびにフィッシャー副議長のタカ派コメントが今月のFOMCにおける利上げ期待を高める一方で、先週発表された米経済指標のうち、重要視される雇用統計ならびにISM製造業景況指数は揃って市場予想を下回ったことで、市場参加者間では米早期利上げについて見方が分かれている。今週は6日の米8月ISM非製造業景況指数以外は目立った経済指標の発表はなく、目先手掛かり材料に欠けるなか、ポジションを一方に傾けづらい。テクニカル分析的にも、1月29日以来の下落トレンドチャネルのレジスタンスラインを上方にブレイクした一方で、104～105円には日足一目均衡表の雲が存在し、強気・弱気双方のシグナルが見て取れる。従って、新規材料待ちの様子見姿勢が比較的強く、方向感の乏しい展開を予想するものの、再来週の日米金融政策決定会合に対する期待感から底値を割れるような展開にはならないだろう。

（3）先週までの相場の推移

先週（8/29～9/2）の値動き：　安値 101.76 円　高値 104.32 円　終値 103.99 円



（資料）ブルームバーグ

2. ユーロ

為替営業第二チーム 坂本 真史

(1)今週の予想レンジ: 1.1050 ～ 1.1350 115.00 ～ 118.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

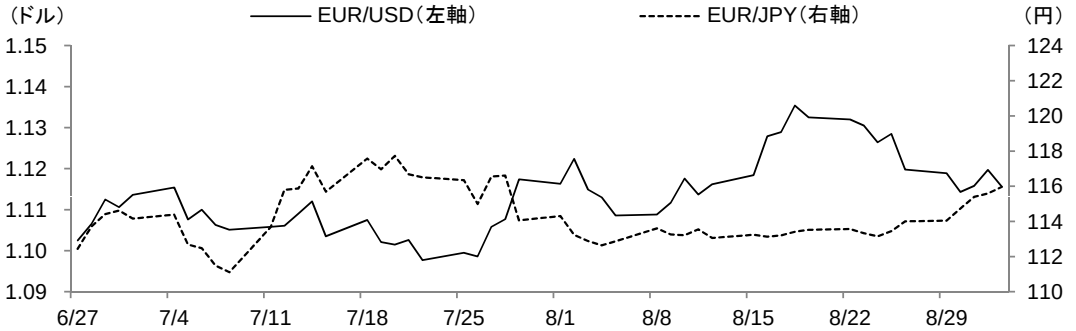
先週のユーロ相場は、対ドルではレンジ推移、対円では上昇する展開となった。対ドルでは、週初8月29日1.12ちょうど近辺でオープン。前週のFRB高官の発言を受けたドル買いの流れが継続する中、1.11台半ばまで下落。翌30日、発表された米8月消費者信頼感指数が良好な結果となると、1.11台前半まで弱含んだ。週央31日、ユーロ圏8月消費者物価指数(HICP)が発表されたものの、前年比+0.8%と予想(同+0.9%)から大きく変わらない結果であったことから相場への影響は限定的となった。その後、発表された米8月ADP雇用統計が予想を上回ったことでドル買い優勢となり、週安値1.1123をつける。翌1日は、週末の米8月雇用統計の発表を控えて動意薄の展開となっていたものの、発表された米8月ISM製造業景況指数が49.4と予想(52.0)ばかりか節目である50.0をも下回る結果となると相場は反転。1.12台までユーロは上昇した。週末2日、米8月雇用統計の結果、非農業部門雇用者数・失業率・平均時給ともに予想を小幅ながら下回ったことで週高値1.1255をつけた。但し、3か月移動平均等で均してみれば決して悲観するほどの結果ではないとの見方も出る中、相場は反転。1.11台半ばまで下落し越週した。対円では、週初114円台前半でオープン。30日にドル/円が一旦弱含んだ局面で週安値113.88円をつけた後は、週を通して堅調推移。週末2日にはドル/円が上昇した局面で週高値116.37円まで上昇し、116円ちょうど近辺で越週した。

今週のユーロ相場は堅調な展開を予想する。2日発表された米8月雇用統計は予想されたほどの結果とはならなかったものの、均してみれば労働市場環境に対して悲観するほどのことはないと確認され、米9月利上げ期待は残存している。従って、21日(木)の米FOMCまで発表される経済指標の結果や要人発言などに相場が上下する展開が継続するだろう。斯かる状況下、今週は8日(木)のECB理事会・ドラギECB総裁記者会見が注目材料だ。前回7月ECB理事会後の記者会見で、ドラギ総裁は「新たな情報が入手されれば、マクロ経済の基調を評価しやすくなる」と発言。9月ECB理事会での追加緩和実施を排除しない姿勢を示している。しかし、今月の理事会で追加緩和を決定したとしても、21日(木)にFOMCが利上げに踏み切れなければドル売り地合いとなり、ECBによる緩和効果が減退する恐れがある。また、先週発表されたユーロ圏8月HICPも大幅な下振れとはなっていない。そのため、今月の理事会では緩和を決定することなく、ドラギ総裁が会見で次回以降の緩和実施を強くにじませる発言をするなど、緩和への地均しを行うに留まると考える。そうなればユーロ相場は堅調な展開となるだろう。そのほかの経済指標では6日(火)にユーロ圏4～6月期GDPの発表が予定されているほか、9日(金)～10日(土)にユーロ圏財務相会合が予定されている。

(3)先週までの相場の推移

先週(8/29～9/2)の値動き:

	安値	高値	終値
(対ドル)	1.1123	1.1255	1.1157
(対円)	113.88	116.37	116.00



(資料)ブルームバーグ

3．英ポンド

欧州資金部　本多 秀俊

(1)今週の予想レンジ:　1.3100　～ 1.3400　　136.50　～ 140.50　円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

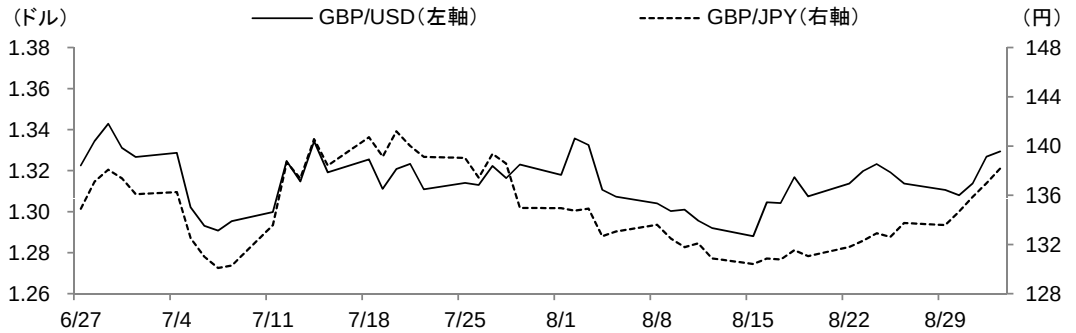
先週の英ポンド相場は、堅調な滑り出しから、週後半に掛けて更に水準を一段切り上げた。金融市場全般の関心は、2日の米8月雇用統計を前に、米利上げ観測の動静に集まっていた。26日の米連銀イエレン議長発言(「利上げに向けた環境はここ数か月で更に整った」)や同フィッシャー副議長発言(「9月利上げの可能性を残している」)などを受け、ドルは週明けから堅調な滑り出しを見せたが、ポンドはそのドルに対してもむしろ堅調気味に推移し、対円や対ユーロでは、特に30日以降、明確に堅調に推移した。もっとも、ポンド堅調にこれといって目立った材料はなく、引き続き6月の英のEU離脱国民投票を受けたポンド急落が過剰な反応=売り過ぎだったという以上に説得力のある解説は難しかった。この間発表されたネーションワイド8月住宅価格(31日)、8月製造業PMI(1日)、同建設業PMI(2日)など英経済指標が軒並み強めに出たのは、ポンド堅調の一因と言えたかもしれない。特に8月製造業PMIは予想を大幅に上回っただけでなく、景気拡大/後退の分水嶺となる50も明確に上回っており、ポンドを一段押し上げるのに貢献した。もっとも、EU離脱が英経済に与える影響は、今後の通商交渉などに負うところが大きく、少なくとも向こう数年ははっきりしないはずで、そう考えれば8月PMIの上振れにポンド買いで飛びつく反応も、結局はこれまでの反動=調整の域を出ていないと位置づけられるべきであろう。注目された米8月雇用統計は全般に予想したよりも弱めと読めたが、米9月利上げの是非に関して、発表前までの見方に明確な変化を加える内容ではなかった。どっちつかずの結果に呼応して、ドルは一旦売り込まれたものの、程なく買い戻された。この局面でも、ポンドは円やユーロに対しては相対的に堅調に推移し、高値圏で週の取引を終えた。

今週の英ポンド相場は、頭打ちから反落を予想。仮に6月末のポンド急落が拙速で過剰な反応だったとしても、EU離脱が英経済に中期的な打撃を与える可能性は現実的で、明確な好材料なしに7月の戻り高値(対ドルで1.3481、対円で143.25)を上抜けて、水準を切り上げていくような展開は想定し難い。上値が限られている以上、調整的なポンド反発以上のポンド高を見込むのは理に適わないのではないか。夏休みから復帰したメイ首相は、先週(31日)閣議を招集し、EU離脱交渉に関して担当閣僚に戦略を示すよう指示した。今後の進展に注目が集まるはずだが、具体的な進展は期待薄と考える。離脱交渉を巡っては、まだまだ明確なことよりも不透明なことの方が多いが、それでも、現在までに明らかになってきたことはいくつかある。ひとつは、離脱交渉に必要とされる数百人単位の専門家の関係省庁における採用が遅々として進んでいないこと。外務省、EU離脱省、国際貿易省の管轄が不鮮明で、権限争いが起きていること。また、離脱派の「不思議な楽観」の根幹にある理屈が「英はEUにモノを売る以上にEUからモノを買っているから」であることもほぼ明白になった。「貿易赤字だから、相手よりも多額の関税が入る」ということらしい。一方の米利上げに関しては、引き続き経済指標次第という前提は変わらないものの、仮に、9月利上げに踏み切るのであれば、米連銀の意向として、現状五分五分の9月利上げ織り込みをもう少し進めさせたいのではないか。緘口令が敷かれる13日より以前に利上げ織り込みを進めさせたいとすると残された時間はそんなにない。米連銀高官の発言にも注意を払っておく必要があろう。

(3)先週までの相場の推移

先週（8/29～9/2）の値動き：

(対ドル)	安値 1.3060	高値 1.3352	終値 1.3290
(対円)	安値 133.35	高値 138.84	終値 138.17



(資料)ブルームバーグ

4. 豪ドル

為替営業第二チーム 島田 貴章

(1)今週の予想レンジ: 0.7500 ～ 0.7650 77.50 ～ 80.50 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

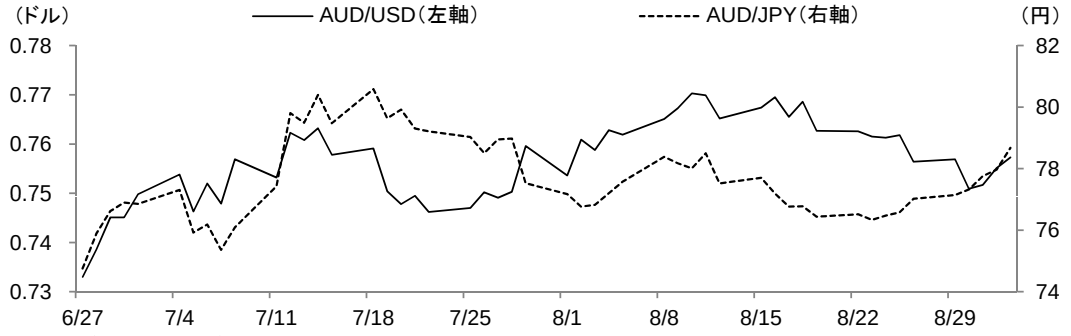
先週の豪ドル相場は、米利上げ観測に左右されながら対ドルで往って来い、対円で上昇した。週初8月29日、豪ドルは対ドル0.75台半ば水準にてオープン。アジア時間には前週末ジャクソンホールでのイエレンFRB議長のタカ派的発言を受けたドル高地合から豪ドル相場は軟調に推移し0.75台前半まで低下。その後、欧米時間には主要株式の上昇を受けたリスク選好の動きにサポートされ、豪ドル相場は0.75台後半の水準を回復。翌30日、フィッシャーFRB副議長のタカ派的なインタビューが報道され再度ドル高が進行。豪ドル相場は0.75ちょうど近辺まで下落。週央31日、揉み合いの過程において一時0.7490の週安値まで下落するも、0.75割れ水準では相応の買い意欲が見られ再度0.75台まで戻す展開。翌9月1日、発表された豪7月小売売上高は前月+0.0%と事前予想同+0.3%を下回り、豪4～6月期民間設備投資は前期比▲5.4%と事前予想(同▲4.0%)を下回る結果となった。ただし、2016/17年の民間設備投資計画は前回調査時より引き上げられ、豪ドル相場は0.75台半ばまで上昇した。週末2日、注目された米8月雇用統計では事前予想を下回った非農業部門雇用者変化数を材料に一時ドル安が進行、豪ドル相場は週高値となる0.7616まで上昇したが、ドル買戻しが優勢となり0.75台半ばまで下落。その後は株式市場の上昇を受けたリスク選好の動きにサポートされ、豪ドル相場は小幅上昇し0.75台後半の水準で越週した。一方、対円では週初29日に77円台ちょうど近辺でオープン。同日、アジア時間には軟化した豪ドル相場を受け対円相場は週安値76.70円まで下落。その後は堅調に推移したドル/円相場に主導される形で豪ドル円相場は堅調推移し、週末2日には週高値78.79円をつけた後同水準にて越週した。

今週の豪ドル相場は上値重い展開を予想する。足許の為替相場では米国9月FOMCにおける利上げ観測が相場を動かす主な要因となっている。今週はFRB高官による発言が複数予定されており、昨週末の米8月雇用統計の結果を考慮すると、タカ派寄りの発言が繰り返される可能性が高いと予想する。先週も相場を動かしたが、米9月利上げの思惑台頭はドル高を通して豪ドル相場の上値を押さえることとなろう。また、今週は豪州準備銀行(RBA)理事会が予定されている。前回8月のRBA理事会にて利下げが実施され、現在の政策金利は過去最低となる1.50%となっている。今回の理事会は前回利下げの影響を見極めるタイミングにあると考えられる。そういった意味で将来の金融政策に関する発言に注目が集まるが、インフレ率の加速が確認されない限りにおいてはタカ派的な発言は期待できないだろう。なお、今週の主な経済指標・イベントとしては、5日(月)に豪8月AiGサービス業指数および豪4～6月期在庫/企業営業利益、6日(火)にRBA理事会および豪4～6月期国際収支、7日(水)に豪8月AiG建設業指数および豪4～6月期GDP、8日(木)に豪7月期貿易収支の発表が予定されている。

(3)先週までの相場の推移

先週(8/29～9/2)の値動き:

(対ドル)	安値 0.7490	高値 0.7616	終値 0.7573
(対円)	安値 76.70	高値 78.79	終値 78.68



(資料)ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようにお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。